

---

## 【フィールドワーク通信】

# オンライン空間を文脈とする X(旧:Twitter)のフィールドワーク—参与の記録とその意義について

打田 秀太 (早稲田大学文学研究科文化人類学コース博士課程)

---

## はじめに

スマートフォンやコンピュータといった電子機器が世界中の人々の間で普及したことによって、それらをインターネットに接続して様々な情報を発信・受信する行為は、年齢や社会的地位を問わず極めて日常的なものとなった。それに伴い、文化人類学の調査や研究においても、多様なフィールドやテーマにおいて、既にオンライン空間の存在は無視できないものとなり始めている。その一方で、オンライン空間の中で普及・実践されている文化の中には、オフライン空間ではまだ認識・言及されていないものも少なくはない。そのような状況において筆者は、修士論文などを通じて、オンライン空間を調査対象に含めた多くの人類学的研究が「国」や「地域」といったオフラインのフィールドとその文脈を基に研究を進めてきた事を指摘し、「SNS」や「Web サイト」のようなオンラインのフィールドを基とする研究アプローチによってオンライン空間の文脈からオンライン空間の文化実践や人々を考察する必要性を論じてきた。しかし、身体を物理的にフィールドに移動させることで調査が成立するオフラインのフィールドワークに対して、「オンライン空間の文化をオンライン空間の文脈においてフィールドワークする<sup>1)</sup>」という筆者の提案するアプローチは、オンライン空間に馴染みのない研究者のみならず、オンライン空間を長期に渡って利用し続けてきた研究者であってもイメージを共有することが難しいかもしれない。

本稿では、筆者が修士論文執筆時に実施した調査における X (旧: Twitter, 以下 Twitter) への参与の過程と、調査によって採集できたデータを紹介することによって、「オンライン空間で参与観察を行う」という提案を具体的に確認すると同時に、その試みを記録として残すことを目的とする。

## 1. 参与の準備

2022 年の 5～12 月の約半年間、筆者は「淫夢<sup>2)</sup>」という文化を対象に、SNS「Twitter」と動画投稿サイト「ニコニコ動画」を中心とするフィールドワーク実施した。筆者は調査として、アカウントを作成した後（多くのオフライン空間調査と同様に）人々が活動している場所・状況に赴き、そこでの文化実践を観察し、ときにはそれに参与した。「淫夢」のようなネット上の文化の多くは様々なオンライン空間で実践されていたが、一方でオンライン空間においては地理的な距離が存在しない故に、始点はどのプラットフォームであっても調査に支障は無いと考えられる。加えて、多様なオンライン空間を横断的に調査しなくてはならない状況に直面した際、アイコンやユーザー ID といった個人識別要素を調査の早期段階で確立しておく事は、異なるプラットフォームにおいて調査者の同一性を周囲に表明する手段にもなり得ると考えた。

筆者が Twitter を始点のフィールドとして選択した理由は、筆者自身が日常的に情報を発受信しているプラットフォームであったこと、そしてその中で「淫夢」に関する情報も不定期ながら幾度も目にしてきたことである。しかし、筆者が調査以前の時点で重点的に運用していたアカウント（以下、非調査用アカウント）は発受信する情報が特定のトピックやコンテンツに依拠したものではなく、2012 年の開設以来、多様な人々と交流をしてきたアカ

ウントであった。そのため、「淫夢」のように、ある特定の文化ないしは文化圏に参加するという調査手法は、筆者の Twitter 利用形態とは異なるアプローチに依拠するものであった。

そこで筆者は、非調査用アカウントで相互フォロー状態だったアカウントらの中から、比較的「淫夢」に関する情報発信が多く、「淫夢」の境界と強い繋がりを持っているように見受けられるアカウントを探した。この際に候補として浮上したのが K 氏であった。筆者は K 氏に Twitter のダイレクトメッセージ（以下、DM）機能を用いてコンタクトを取り、調査概要の説明をした上で、調査用アカウント開設についての助言を求めた。K 氏のアカウントは完全に「淫夢」に依拠したものではないものの、FF（フォロー／フォロワーの略）の多くが「淫夢」に関する情報発信を行っているアカウントであり、K 氏のアカウント自身も比較的高い頻度で「淫夢」に関する情報を発信していた。筆者が尋ねた「Twitter で淫夢をフィールドワークするためにはどのようにアカウントを作成すればいいだろうか」という問いに対し、K 氏は、自身がアカウントを開設した直後は「投稿者」と呼ばれる動画配信サイトで動画形式の情報発信を行っているユーザーをフォローした事、その後は「おすすめユーザー」機能が「淫夢」に関するアカウントを表示し始めたため、それらをフォローし始めた事を教えてくれた。また、実際に K 氏がアカウント作成時にフォローした投稿者らのアカウントも、具体的にいくつか提示してもらうことが出来た。

## 2. アカウントの設定

2022年5月14日、筆者は Twitter アカウント「@Ethno514」（以下、調査用アカウント）を作成し、アイコンとホーム画像を設定した。上述のように、「アイコンやユーザー ID といった個人識別要素を調査の早期段階で確立しておく」事を一つの目的としていたため、これらは調査開始日以前から比較的時間をかけて検討していた要素でもある。事前に予備調査をする中で、また自身が「淫夢」に関する情報に触れていた中で、あまりに「淫夢」に直接的な ID やアイコン<sup>3)</sup>は時に「TPO を弁えずに淫夢の文化実践をする者」や「オンライン空間の倫理に反した言動をとる者」のイメージと紐づけられ、人々に忌避される可能性があると考えた。その上で、ユーザー ID は「Ethnography」の前半部分をトリミングしたものに、「淫夢」の文化圏で頻繁に用いられる数字のスラング「114514」の後半を繋げたものである。この ID に伴い、アカウント名は「Ethno」とし、調査開始日も 5/14 とすることを決定した。

また、アイコンとして直接的な「淫夢」の画像を使用する事はオンライン空間の文脈的にも、オフライン空間での倫理的にも憚られたため、「淫夢」の中でも比較的有名な画像に類似した画像をアイコンとして使用し、ホーム画像はその意図が分かりやすくなるようにペイントソフトを用いて作成した。ここで使用したアイコン画像は Twitter 以外のオンライン空間における調査用のアカウントやスペースでも積極的に採用し、筆者の個人識別要素として機能するように図った。

画像の設定後は、アカウントプロフィールに専攻や調査テーマを入力した。筆者の非調査用アカウントからの観測範囲や、事前にいくつか閲覧していた「淫夢」関連のアカウントらの間では、多くのユーザーがオフラインのステータスを自己開示していなかったため、この段階では具体的な大学名やオフラインにおける本名を入力することはしなかった。プロフィールに表記した文章は調査用アカウントを直接タップ／クリックしなければ全文を閲覧する事は出来ないため、FF 外部やいわゆる「バブサ<sup>4)</sup>」と呼ばれるような語彙の検索からも自身の研究が周知されるよう、また RT（現：リポスト）やリプライといったリアクションが直接受けられるよう、「淫夢」を中心に、オンライン上の文化に関する実践や交流について、人類学的なアプローチでの研究をしています（改行）よろしくお願ひします 🍷（ナスの絵文字）」といったツイート（現：ポスト）を発信し、これをプロフィールに固定表示設定した。

## 3. タイムラインの構築

調査を行う「身体」の準備が完了したところで、参加する場所としてのタイムライン<sup>5)</sup>を構築し、観察をするための人々や文化実践に出会うため、自発的なフォローを開始した。フォローの対象としたアカウントは、淫夢について高頻度に言及しているアカウント、もしくは自身が淫夢に関与している旨を何らかの形で表明しているアカ

アカウントであった。初めは、K 氏に提供して頂いた投稿者らのアカウントのほか、それらのアカウントが発信したツイートに対して RT やいいね、リプライ等のリアクションをとっていたアカウントをフォローした。

調査開始時点での筆者は「そもそも調査が成立するのか否か」に敏感になっていた。そのため、最初期のフォローの基準として「FF 比 (フォローしているアカウントとされているアカウントの比率)」, すなわち対象のアカウントが他アカウントにフォローされた際に、どれほどの割合でフォローバックを行っているかを重視した。筆者自身、非調査用アカウントが他アカウントにフォローされた際、そのアカウントのフォロワーがゼロないし一桁台であった際は、所謂スパムアカウントである可能性を警戒することがあったからである。

また、筆者がプロフィールに記載した「淫夢を学術的に研究する」という意思表示は、Twitter において実際にそのような文言が頻繁に冗談として用いられているように、ふざけたアカウントとしてブロックや誤解を招きかねないと当時の筆者は考えていた。そのため、まずはある程度のアカウントにフォローされる事と、自身が本当に研究者であると証明できるようなツイートを発信する事を目標とした。

アカウントを開設した初日は 20 アカウントほどをフォローする予定であったが、アカウントをフォローし、ツイートを閲覧する事で、ある程度人々の繋がりが見えてきた感覚もあり、結果的には 25 のアカウントをフォローし、そのうち 6 つのアカウントから当日中にフォローバックをしてもらうことが出来た。調査用アカウントのフォロワーは「こちらからのフォローに対してフォローバックをしたアカウント」と「自発的にフォローをしたアカウント」に大きく二分できる。後者のフォロワーは調査用アカウントのツイートが拡散されたタイミングに生じることが最も多く、また、調査の期間が長くなるにつれて後者の割合が増加していった。

#### 4. 情報の発信とコミュニケーション

調査自体が手探りであったこともあり、ツイートやリプライのような調査用アカウントでの能動的な行為を筆者は段階的に実施した。調査開始の翌日である 5 月 15 日には、前述の固定用ツイートが初めて RT されたこともあり、自身が研究者である事を強調しつつ、スパムアカウント等ではない事をアピールするために先行研究の書籍紹介をツイート<sup>6)</sup>する事とした。このツイートは固定ツイートよりも他アカウントからのリアクションが多かったため、翌日も同様の書籍紹介をツイートしている。

筆者自身も「ある程度フォロワーがいると安心感があるのか、フォロバ率が良くなってきた気がする。フォロバ + 固定ツイふあぼとかフォロバ + 過去ツイ RT とかも増えていて、嬉しい (筆者 5 月 17 日調査ノートから抜粋)」と記録していたように、ある程度情報発信をし、FF が増えてきたことで、それ以前よりもフォローしたアカウントからのフォローバック率が上昇しているように感じられた。5 月 20 日には、学問ではなく淫夢に関連したツイート<sup>7)</sup>を発信した。アカウントの増えてきたタイムラインでは淫夢と関係のないツイートも少なくはない一方で、参与観察というアプローチを掲げていることから、調査用アカウントを「淫夢の研究をしているアカウント」から「淫夢の文化圏のアカウント」へと移行したい気持ちがあったからである。

調査開始から一週間が経過し、タイムラインでの交流形態にも慣れてきた感覚をおぼえたため、調査用アカウントからの能動的なリプライを実践し始めた。およそこの辺りの時期から、他アカウントからの自発的なフォローや、タイムラインにおいてのコミュニケーションが生まれてきたように感じる。5 月末頃にはリプライや RT, いいねの他、後述する DM やタイムライン上での交流も日常的になり、時には筆者がタイムラインを閲覧していない間に筆者の話題でコミュニケーションが交わされるなど、比較的順調に参与を実践出来ていたように感じられた。その一方で、フォロワーのアカウントに倣って 6 月に開設した「質問箱」という筆者に対する質問を募集する Web サイトにほとんど投稿が集まらなかったことや、日常的にスラングを用いていたアカウントが送信してきた DM が丁寧語であったこと等から推測できるように、FF のアカウントらとの間には一定の距離感があったこともまた事実だろう。

## 5. 聞き取り調査

本格的な資料採集の開始として、筆者が聞き取りの調査協力者を募集した<sup>8)</sup>のは7月7日であった。該当ツイートは、タイムライン上で話題となっていたツイートで用いられていた「淫夢ネタにはまってる人々」という若干不自然な表現<sup>9)</sup>を引用する形で発信したものである。しかし、幾度かの拡散を経て、結果的にはそういった背景とは関係なしに多くのアカウントからリアクションが寄せられた。また同様に、7月21日に発信した講義における研究発表の様子を写したツイートにも多くのリアクションが集まった。これらのツイートが多くのリアクションを受けた事で、それ以前の「こちらから一方的にフォローしたアカウント」とは異なる「明確に調査協力の旨を提示したうえでFFとなったアカウント」が増加したとも捉えられる。彼らが見せる能動的な協力の姿勢や筆者に対する激励は、「淫夢に関わる人々の語りを採集する」という研究の方向性とその必要性を強く再認識するきっかけとなった。

筆者が調査の際に実施した聞き取り調査は、Twitter外のプラットフォームを用いた音声通話による聞き取りと、TwitterのDM機能を用いたテキストによる聞き取りの2種に分類出来る。前者は主にSNSの「Discord<sup>10)</sup>」上に筆者が作成した聞き取り用のサーバーで実施した。各々の調査協力者に対してどちらかの手法のみを実施した訳では無く、会話の流れの中で音声通話とテキストチャットの双方を行き来することもあったが、筆者の関心は「オンライン空間でのフィールドワーク」であったため、オフライン空間で調査協力者と対面する形で調査を実施する事は避けた。それに伴い、調査協力者のオフライン空間における性別や地位等のステータスについて筆者は能動的に尋ねておらず、また調査協力者が自発的に開示した際も、その“真実性”を確かめることはしていない。

## 6. オンライン空間を参与観察する意義

上述の調査を踏まえ、本節ではオンライン空間に「フィールドワーク」という手法を適用する意義について考えたい。多くの先行研究において、オンライン空間の言説を扱う調査では「語彙による検索」や「量的な収集と分析」といった手法が適用されてきた。それらと比較した際に、参与観察というアプローチが持つ最も顕著な特性は「文脈の把握」と言えるだろう。ここでの「文脈」とは、「タイムラインの流れ」や「テキストのニュアンス」である。例えば、上述した筆者による調査協力者募集のツイートは、当初は調査用アカウントのタイムラインに半ば便乗する形で発信された情報であり、RTをしたのもその話題に言及していたフォロワーであった。しかし、拡散される中でツイートは「調査協力者の募集」としての側面によって拡散されるようになり、筆者自身もそれに再度便乗する形で補足のリプライを投稿している<sup>11)</sup>。ツイートは必ずしも各々で独立した情報ではなく、発信された瞬間のタイムラインと複雑に絡み合っているといえる。

また、「空中リプライ」と呼ばれる慣習も文脈を考える上で重要だと考えられる。空中リプライとは、通常のリプライとは異なりリアクションをする側/される側がそれぞれ独立したツイートとなっているコミュニケーション方法のことを指す。例えば、筆者はタイムライン上で見かけた「中国での淫夢事情が気になる」というフォロワーアカウントのツイートに対し、「ACG (Anime/Comic/Game) の中の1ジャンルであり、研究室の中国人留学生は皆知っていた」といった旨を空中リプライによって送信している<sup>12)</sup>。多くの場合、空中リプライはリプライを向けられている側のアカウントが該当のツイートにいいねを付けることで「既読」の意を示す場合が多いようであるが、タイムラインの更新速度によっては相手に認知されない事もあり、相手にリプライとして届いているか否かは多くのアカウントがあまり気にしていないようだった。ある空中リプライでの会話に対して第三者のアカウントが空中リプライで反応する、といったように、必ずしも一対一のコミュニケーションではなく、比較的開かれた会話である事も特徴だろう。

また、システムの側面から「非公開アカウント」についても述べたい。Twitterではユーザーがツイートやいいね欄などを自身で承認したフォロワー以外が閲覧できないように設定する事が可能で、このようなアカウントは一

般に「鍵アカウント／鍵垢」と呼称されている。筆者の調査においても、「淫夢」のようなオフライン空間の倫理に反する文化実践のほか、単純に過激な情報発信をするアカウントやオフライン空間における情報を頻繁に発信するアカウントは鍵垢である事が多く、中には「サブ垢」や「裏垢」と称して日常的に使用するアカウントとは別に鍵垢を用意しているユーザーも多く見られた。こうした鍵垢はその性質上、陰湿な言動や誹謗中傷の発信も多かった一方で、文化圏内で多くのアカウントを承認している鍵垢は、文化圏において実質的にはオープンなアカウントとして機能しながらも、文化圏の外部からの言及や監視を回避することが出来ていた。こうした実態は、オンライン空間においても、その文脈を把握するためにはオフライン空間の調査と同様、調査者が協力者らと強い信頼関係を築かなくてはならない必要性を示しているだろう。実際に、調査の初期に筆者と FF 関係になった M 氏のサブ垢は、M 氏のメインアカウントと FF になった段階ではフォロー申請が承認されなかったものの、何度か聞き取り調査を行った後はサブ垢の方から自発的なフォローをしてくれた。このように、フォロワーのサブ垢である鍵垢に対しては、申請したフォローが承認されるか否かによって相手ユーザーとの距離感や関係性を知ることも出来た。

## おわりに

以上、本稿では、調査の準備段階から実際に開始するまで、そしてその後人々との交流がある程度生じるまでを追体験的に記述する事で、オンライン空間におけるフィールドワークの一つの在り方を提示した。また、そのような手法をとる意義として、文化圏外部からのアプローチでは採集の困難な資料や、人々の間で共有されていた文脈の存在を提示した。

一方で、調査の予備段階での準備やフィールドワーク開始直後の段階的な行動などからも読み取れるように、調査中の筆者は、所謂「バズ」や「炎上」のようなオンライン空間における過剰・大規模なリアクションを出来るだけ回避しようと努めていた。その理由としては、調査協力者の急激な増加による「質的調査」からの逸脱や、物議を醸すテーマを大々的に研究する事による周囲やオフラインへの被害<sup>13)</sup>に対する忌避が挙げられる。しかし、筆者が講義において実施した研究紹介のパワーポイントを撮影したツイートが2023年11月19日時点で35000ほどのいいねを記録しているように、筆者の研究テーマ・アプローチ自体の抱える「バズ／炎上」可能性は比較的高いものだと考えられる。オンライン空間は誰もが何処からでもアクセス可能なフィールドであり、実際に上記のツイートにも多くのリプライや RT 後のツイート、引用 RT 等によってリアクションが寄せられていた。こうした大規模な、そして一方向的なリアクションを人類学的にどのように捉えるのかに関しては、今後のフィールドワークで向き合っていきたいと考えている。オンライン空間に存在している多種多様なフィールドや人々、文化に対し、人類学を研究する学生としてどのように向き合っていく事が出来るのか、今後も考えていきたい。

## 註

- 1) 同様のアプローチとして、例えばベルストーフ (Boellstorff) の仮想世界 *Second Life* 研究などが挙げられる [Boellstorff 2015]。ベルストーフが「*Second Life* というヴァーチャルな場所」を調査対象としたのに対し、筆者はオンライン空間における「文化圏・文化実践」を調査対象としている点に大きな差異がある。ベルストーフは *Second Life* 内での様々な人やものを議論の射程に捉えることが出来た一方で、SNS やニュースサイトのような他プラットフォームを調査する事は出来なかったと述べた (同上: 7)。それに対し、筆者の調査アプローチでは特定のプラットフォームに依拠することなく横断的な調査や参与が可能であった一方で、各々のプラットフォームで遭遇した様々な人やものについて、その全てを議論の対象に含めることが出来なかった。
- 2) 本稿における「淫夢」とは、ゲイ男性向けアダルトビデオの台詞を用いたコミュニケーション作法や、映像や音声を加工した創作物からなる文化のことを指す。2002年頃にネット掲示板で原型となる実践が生まれてから現在に至るまで20年以上の間、多種多様な形態／人々／プラットフォームによって実践され続けてきた一方で、その非倫理／反社会的な側面からオフライン空間での言及が憚られてきた文化でもある。
- 3) 「淫夢に直接的」とは、「115514」や「YJSNPI」といった淫夢に関するスラングをそのまま記した ID や、ゲイ男性向けアダルトビデオのスクリーンショットを設定したアイコン等を想定している。

- 4) 「パブサ」とは、「パブリックサーチ」の略称である。検索者が自身以外のアカウントやコンテンツの名前でツイート検索を行うことを指す。
- 5) 本稿における「タイムライン」とは、フォローしているアカウントのツイートが縦に時系列順で表示される「フォロー中」画面のことを指している。
- 6) <https://twitter.com/Ethno514/status/1525834476709814272>  
最終確認日：2023年12月14日。
- 7) <https://twitter.com/Ethno514/status/1527532576792989696>  
最終確認日：2023年12月14日。
- 8) <https://twitter.com/Ethno514/status/1544707130774523907>  
最終確認日：2023年12月14日。
- 9) 通常、このような人々は「淫夢厨」と呼称される、もしくは自称する事が多いが、意図的にこの語彙を避けたかのような文章だとして、タイムライン上では幾名かのフォロワーが話題に挙げていた。
- 10) 「Discord」とは、テキストチャットと音声／ビデオ通話機能を標準搭載したSNSで、主な特徴として「URLによる招待制」である点が挙げられる。これは他SNSにおけるグループチャットのような機能で、サーバー（＝グループ）の作成者やそのメンバーは招待用のURLを他SNS等で公開する事で、そのURLにアクセスしたユーザーをサーバーに参加させることが出来る。サーバーは、全てのユーザーに公開されている訳では無い一方で、URLを入手すれば誰でも参加できるという特性から、オンラインコンテンツの情報共有サーバーやデジタルゲームの遊び場サーバー等、LINEやTwitterといった他SNSとはまた異なる活用をされている。
- 11) <https://twitter.com/Ethno514/status/1548689198231605249>  
最終確認日：2023年12月14日。
- 12) <https://twitter.com/Ethno514/status/1533099864304717824>  
最終確認日：2023年12月14日。
- 13) 現在進行形の被害を受けている人々を考慮し本稿では具体的な言及を避けるが、例えば執拗な殺害予告や誹謗中傷、オフライン空間でのステータス特定とそれによる物理的な干渉等、オンライン空間においては「淫夢」のような文化圏に関して何らかのアクションを行ったユーザーを対象とする加害的な言動が見られることも多い。

## 引用文献

Boellstorff, Tom

2015 *Coming of Age in Second Life: An Anthropologist Explores the Virtually Human*. New Jersey: Princeton University Press.